

〔研究ノート〕

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

——カルメン・モチヅキさんとヤエ・アイハラさんのあゆみ(前編)——

賀 川 真 理

I はじめに

第二次世界大戦中、アメリカ合衆国(以下、アメリカ)において、日系アメリカ人が強制収容されたことは知っていても、日系ラテンアメリカ人らがアメリカの指令によってアメリカの抑留所に収容され、結果的に人質として日本に行くことを余儀なくされ、あるいはラテンアメリカ本国に帰ることが認められず、不法外国人扱いでアメリカに残らざるを得なかった人たちの存在は、一般のアメリカ人および日本人にとっては、まだまだ知られていないと考えられる¹⁾。

しかし、1990年代以降、徐々にではあるが一部の研究者を中心に、こうした人たちの存在が知れ渡るようになった。では、そのきっかけはどこに求められるのであろうか。それは、第二次世界大戦中に強制収容を余儀なくされた日系アメリカ人に対し、1988年にレーガン(Ronald Reagan)大統領の署名により市民自由法(the Civil Liberties Act of 1988)が成立し、彼らへの国家としての謝罪と、同法が成立した時点で申請を行う生存者に、一人当たり2万ドルの補償金が支払われるという戦後補償が実現した際、その対象者は収容されていた時点でアメリカの市民権保有者もしくは永住者に限られ、日系ラテンアメリカ人は申請をしても認められなかったという事実を端を発する。

そのため、このことを不服としてペルー出身の日系人らが立ち上がり、1991年には日系ペルー人の歴史を後世に伝えるために「日系ペルー人口述歴史計画(Japanese Peruvian Oral

History Project)」が、1996年には「正義のための闘い(Campaign for Justice)²⁾」が組織され、2000年には「公民権と戦後補償を求める日系組織(Nikkei for Civil Rights & Redress: NCCR)³⁾」が立ち上がった。とりわけ1996年にはモチヅキ裁判(Mochizuki et. al. v. United States, 43 Fed. Cl. 97)というクラス訴訟が起こされ、日系ペルー人に対する戦後補償の実現に向けて世間にアピールしたことにより、ようやく一部の人々がその事実を知るきっかけが生じたと言える。

本研究ノートでは、その原告の一人となられたカルメン・モチヅキ(Carmen Mochizuki)さんと、同氏と同じくテキサス州の抑留所に収容された日系アメリカ人であられるヤエ・アイハラ(Yae Aihara)さんへのインタビューを収録するものである。

このインタビューを通じて、くしくもテキサス州の抑留所に収容されることになった日系ラテンアメリカ人と日系アメリカ人の事例を紹介する。これにより、あるペルー生まれの日系人が、国際政治の波に翻弄され、本国であるペルー、アメリカ、そして一度も行ったことがない日本に渡って生活をし、その後アメリカに戻ってから現在に至るまでの一連の経緯と、日系アメリカ人であっても家族との再会を果たすため、やむなく日本への帰国を志願しながらも、交換船が定員に達し、結局はアメリカにおける抑留所での生活を余儀なくされ、その後西海岸に転居し、今日に至るまでの経緯を明らかにすることを目的とする。同時に、戦争終結から71年を迎えた今日、日系人として当時や現在につ

いての想いをお二人に語って頂くことにした。

なお、インタビューは日本語で行い、原則としてご本人の言葉通りに記述したが、お二人とも日常生活では英語を使用されているため、執筆者の判断で英語をそのまま掲載したものや、趣旨を損ねない範囲で文言を一部修正したこと、補足説明を加えたものについては()内に書いたことをお断りしておく。また、本研究ノートには紙数の制約があるため、本号と次号の2回に分けて掲載することにした。

II インタビュー

それでは、これからインタビューをさせて頂きたく思います。今日は2016年8月30日火曜日で、時間は今、午前9時30分を少し回ったところですが、アメリカのカリフォルニア州ロサンゼルスにあるヤエ・アイハラさん(以下、ヤエさん)のご自宅でインタビューをさせて頂くことになりました。

このたびのインタビューでは、第二次世界大戦中にテキサス州のクリスタル・シティ抑留所⁴⁾に偶然にもほぼ同時期に収容され、一時期を過ごされた、ヤエさんと、カルメン・モチツキさん(以下、カルメンさん)のお二人に、特にクリスタル・シティの抑留所での生活のことと、それから戦後補償のことを中心にお話をお伺いしたいと思います。今日はお忙しいところ、お時間を取って頂き、どうもありがとうございます。

(ヤエさん)いいえ。(カルメンさん)いいえ、こちらこそ。(執筆者)事前にお二人にお渡ししたメモに書かせて頂きましたが、今日のインタビューの流れを話させて頂きます。まず私の自己紹介を簡単にさせて頂き、今回のインタビューの目的をお伝えしたあとに、恐れ入りますが、お二人の自己紹介をお願い致します。その後、順番に質問をさせて頂きたく思いますので、よろしくお願い致します。

(執筆者の自己紹介および今回のインタビューの目的については省略)

Q それでは、まずヤエさんから自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。

はい。私は1925(大正14)年、ワシントン州タコマで生まれました。親はグロサリー・ストアで、マーケットを持っていました。

その当時、アメリカ社会はとてとても人種差別がひどかったの。特にワシントン州は、戦争がはじまった頃、私は高校4年生でhigh schoolを卒業するところだったの。それで、high schoolを卒業するダンス・パーティがあるのね。

それは、白人で、キリスト教徒でないと参加できないの。全卒業生、ダメなの。白人で、Catholicはダメ。なぜかという、そのダンス・パーティはカントリー・クラブというゴルフ場の設備を借りて(行われることになって)ね、そういうところは白人と、クリスチャンでないと入れないの。そして(同様に)学生会の役目(役職になることも)、ダメ(できない)。そして学校の向かいにある小さい食べるところ、inn(食堂)、あそこはダメ(入ることができない)、白人の友だちがあれば、彼たちに頼んで食べ物を買って、持ってきてもらうの。私たちはそこに入れないの。断られるの。そういう社会だったの。そして学校の先生は、女性ならMissでないとダメ。結婚している女性はダメ、Missでないと学校の先生は。

Q Missでないと学校の先生になれなかったのですか。

Missでしかねれないの、結婚していたらダメだったの。(カルメンさん)独身者。(ヤエさん)独身だけだったの、あの当時。

Q それは、アジア系だからダメだったのですか。

No, no, no. 白人の先生も、みんな独身。

Q 結婚したら辞める、ということですか。初めて知りました。

辞める、はい。そういうような社会だったの。

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

私たちが住んでいた区域は、もうほとんど普通の白人と付き合いができないような、東洋系、Chinese (中国系) とか、Jewish (ユダヤ系) (が住んでいて)、それで黒人 (アフリカ系の人々) はいなかったけれど、黒人が私たち (日系人) の区域に来たら、もうすぐ警察が来るの。そういうような社会だったの。

Q それは、黒人の方たちがアジア系の方たちと仲良くしてはいけないから、警察が来たのですか。

とにかく、(彼らが) 住んでいるところではないでしょ。「あんた、ここで何をしているか。」と、すぐ言われるの。だから本当に、今日の社会と全く違いました。

Q そういった状況は、戦争が終わるまで続いたのですか。

そうですね。はじめた頃、そうだったの。戦争がはじまって、私たちは収容所に入ったから、途中の状態は知らなかったけれど、とにかく差別がひどかったの。そして、真珠湾攻撃が行われた日の夜、FBI (Federal Bureau of Investigation) が (ヤエさんの) 家に来て、家宅捜索して、父をその場で逮捕したの。(その後) 1年半、(父を) 見ませんでした。だから、収容所に入る命令が来たら、母が一人でマーケットの (財産を) 全部処理しないと (ならなかった) でしょ。それで、大きい肉のケースとか、肉を切る・作る機械、はかり、そういうものを全部、たった25ドルで売りました。

Q 全部を、25ドルですか。今のお金の価値にしたら、どれ位でしょうか。

それはもう、わからない。25ドル、はかりも買うことができない。大変でした。だけど一番損をしたのは、ロサンジェルス の南に Long Beach というところがあって、その南に Terminal Island という小さな島があって、その漁師はほとんど日本人、和歌山県の。その当時、ロサンジェルス の家は、1000ドルで買った

の。だけど、漁師の船、その費用は少なくとも2万ドル、まっさらなのは3万ドルでした。それを月賦で払って生活していたけれど、月賦を払うことができなくなったら、船はなしに (手放さなければならぬ) になってしまうの。彼たちが一番損した。あんな大きい買い物をして。持って行かれないでしょ、収容所には。だから、大変でした。

Q それはもう、本当に安い値段で売るか、置いて行くしかなかったのですか。

Yeah, 置いて行く。置いて行ったの。

Q あとからの質問とも関係するのですが、ヤエさんのお父様は、当時どのようなお仕事をされていたのですか。

マーケットを営んでいたの。そして和歌山県人会の会長をしていたの。そして、弟二人が柔道を習っていたから、父は道場の顧問。父は若い時剣道が上手だったの。だから、剣道もしているし、柔道道場の顧問、和歌山県人会の会長、そういう理由で逮捕されたと思うの。とにかく FBI は、武道や仏教、そういうことに対して、何も知らなかったの。だから、ほとんどの仏教の開教使とか、日本語学校の先生たち、みんな逮捕されたの。

Q 真珠湾攻撃のその日に逮捕されたということは、もう事前に名前が挙がっていて、何かがあった時にはすぐに行動に移せるようにしていたのでしょうか。

もう、ちゃんと知っていたの。その一世の中にそういう informer がいて、FBI に言うのね。この人はこれをしていて、と知らせるの。(カルメンさん) 情報を知らせる。(ヤエさん) 知らせる。犬。それで彼が、一人一人に対して、逮捕したら25ドルもらったという噂があったの。(カルメンさん) 結局、あれ秘密に (そうするの) ね。密告。(ヤエさん) そう、そう。密告。まあ、あの実際にあったかどうかはわからないけれど、そういう噂があったの。(カルメンさん) そういう

ことがあったのね。(執筆者)シアトルやその周辺では、そうして大勢の方が、そのようなかたちで、まずはその日のうちに逮捕、連行されてしまったのです。またのちほど、伺います。ありがとうございました。

Q では続いてカルメンさんの自己紹介をお願い致します。

私の名前はカルメン・モチヅキですが、旧姓は比嘉です。ペルー生まれのペルー二世です。

第二次大戦がはじまった頃、すでにペルーの政府はブラック・リストを作成していたと思います。そしてそれに基づいて、主にコミュニティのリーダー、それから新聞記者、それから学校の先生、そういう人たちをFBIという、あの普通の警官ではないのですよ。連邦警官が連行して、主人が家にいた場合はその場でjailに連れて行かれたの。いない人は、あなたのお手紙に書いてあったように、主人がいないために、アート・シバヤマ(Art Shibayama)さん(以下、シバヤマさん)の場合は、(代わりに)お母さんが連れて行かれたの。小さな子供が大勢いる。(執筆者)お母さんだけが、連行されたのですか。(カルメンさん)はい。

結局うちの父親の場合、20年もその国に住んで、悪いこともしていないと言って、1年間逃げたのですよ。友だちがbanana farm(バナナ園)にいて、そこに隠れて、時たま夜になって帽子をかぶって変装して家に帰ってきたの、いつも。でも、その繰り返しで、1回FBIが学校に来たの。娘が多分、学校に行っているの知っていたのでしょうか。

それで、一緒に遠い道を歩いて、家まで着いて、その時に父は家にいたの。それで、ああ今日はもう完全に捕まえられると思って、そしてFBIに、(機転を利かせて)「私ね、裏に回って、家を開けなくちゃいけないから、ここでちょっと待っていて下さい。」と言って、回ってね、うちの父がちょうどそこにいたの。「いた。」と言ったの。そしたら(父は)「高飛び」をしてね、次のところに逃げて、その時は助かったわけで

すよね。それでまた一応戻って、ドアを開けたら、FBIは全部サーチした(探し回った)の。(父が)いないから、もう帰って。

それから期間として1年間位、私たちがお父さんに会うためにfarmに行ったのね。そして姉は、多分FBIが父の行方を捜すために、(カルメンさんたちのあとを)ついて行ったかもしれないと言っていました。

それで1年位して、(ペルー)政府から手紙が来ました。そこには、今出頭しないと、lifetimeに亘ってjailに入れて、面会させないと書いてあったの。南米では(住民の多くが)カトリック教徒で、だから私はカルメンという名前で、その名付け親はえらい方だったのね。それでその手紙を見せたら、一応出てきた方がいいとアドバイスをもらって、(父が)出てきたら、その場でjailに連れて行かれて、そしてアメリカに行くまでの3週間、電車で、リマにあるjailまで、姉たちと母とみんなでいつも(父に)会いに行っていたんです。

その後、もうアメリカ行きが決まって、家族と一緒にいくことになったのですが、(船上では)男の人はみんなデッキの一番下の方(に詰め込まれました)。ほら、布で作ったベッドってあったでしょ、昔。(ヤエさん)Aha。(カルメンさん)それ(そうしたベッドがあるだけだった)。そして一日約10-15分、デッキの上はみんな子供とその家族(がいて)、そして一日一回、みんなお父さんと面会できた瞬間があったの。それが3週間、ペルーを出発して、アメリカのルイジアナ(州)の、ニューオリンズに着いたの。

そして、そこへ着いて、大きな蔵(倉庫)、warehouseに入れられて、みんな洋服を脱ぎなさいと言われたの。裸。それでDDT⁵⁾って、ご存知。(執筆者)はい。(カルメンさん)それをsprayされたの。あの頃ね、10歳や11歳の子供というのは、今と違って何かとても純粹でしたよね、昔々。それで私は大人になったら、毛が生えたと初めてわかったの。というのは、もう、みんな丸裸。というのは、私はペルーで母と一

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

緒にお風呂に行ったら、いつも母はタオルを前に当て、こう(体を)隠していたの。だから私は、大人になると自然にね、体(つき)が変わっていくことを全然知らなかったの。そしてそれを見たとたん、本当にびっくりしちゃった。それでキャンプにいた2年間、(自分の体が)だんだん変わっていったって思ったんですよね。まあ、私もあの大人みたいに、これから体が変わっていくのかなと思うと、ちょっと悲しかったのね。初めて、本当にびっくりして。

それで、キャンプにいた2年間の思い出は、楽しかったよね(とヤエさんに尋ねる)。(ヤエさん)(うなずかれる。)(カルメンさん)というのは、親たちはそれぞれみんな仕事に行って、そして私たちは一応学校に行かせて頂いたんですよね。キャンプでの生活といたら、硬い紙で作ったお金をくれたんですよね。赤いのと、グリーンのと。赤いのだったらマーケットで、食料品などをショッピングできるの。一方で、グリーンの方はPX⁶⁾で、洋服とか、日常生活で使う物を買うことができたの。

(クリスタル・シティのキャンプでの)待遇はね、(日系アメリカ人を収容した)ほかの10か所のキャンプ(強制収容所)があったと思うのですが、その人たちとは全然違う生活でしたよね。(ヤエさん)Aha。(カルメンさん)というのは、あの方たちは例えば食事ですが、ご飯を頂く時は、"Let's go,"と言って、一斉にみんな座って頂いていたの。私たちはね、行った時からみんなバラックのような家で、こう二軒に分かれていて、二家族が住めるようになっていたんですよね。それで行ったらね、お鍋も、ベッドも、アイスボックスも、ストーヴも、何でも揃っているの。

というのは、私たちはアメリカに来るまで、どうして連れて来たのか(来られることになったのか)、それも全然納得がいなくて、(自分たちを)捕虜の交換のために使うことをあとになって悟ったのね。だから(アメリカ側にしてみれば)、その人たちを大事にしないと、日本にいる大勢の捕虜をアメリカに返してもらえないと

考えてね。ですから、待遇は全然違いましたよ。ミルクは毎朝配達してくれましたし、ある時は(暑かったので)アイスボックスに氷を詰めなくてはいけなくて、氷の配達が毎日ありました。

そして夏になると、毎日(華氏)100度以上ね、106度とか、110度とか。(ヤエさん)蒸し暑い。(カルメンさん)本当に、砂漠のようなところ。(ヤエさん)Yeah?(カルメンさん)desertの中だから。(ヤエさん)Crystal City?(カルメンさん)ほら、何にもないところに…。(ヤエさん)No, あれは砂漠ではないよ。You call it plains。(カルメンさん)Plains?(ヤエさん)砂漠と、ちょっと(違う)。湿度が高いの、but暑い。温度が高いの。(カルメンさん)もう、本当に暑い。(ヤエさん)Yeah. だから、日本の暑さのように蒸し暑い。(カルメンさん)もう本当ね。

それでね、swimming poolがあったね。で、そういう暑さだと、もう子供ですから、毎日歩いてね、そのswimming poolでね、楽しかったね。(ヤエさん)Uh-huh。(カルメンさん)それでも、歯だけが白く、真っ黒でしたね。それでね、その時にね、ペルーのお友だち二人が溺れて亡くなったんですよね。というのは、(プールは)子供用で、こうラックがあって、ここは浅い方、ここはすごく深い。もう8フィート(2メートル44センチ)位深い。それをこう、手をつないでこうやるじゃないですか、一人一人。誰かが手を放したか何かわからないけれど、溺れて、大騒ぎでした。いまだに、私、覚えているけど。あの時、大変でした。

キャンプでの思い出といたら、子供でしたから、ただ学校に行って。日本語学校に行ったんですけど、外に出ればペルーの人たちは集まって、もうスパニッシュだけで(話をしていました)。ただ授業をする(受ける)だけで、全然日本語に興味はなかったね、あの頃。

そして(学校の)先生は、ハワイのお坊さんでしたね。立派な方でした、みんな。(執筆者)ハワイから、先生として連れて来られたのですか。(ヤエさん)Oh, yeah. その当時、ハワイの人口は大方日系人でした。3分の2。それで、彼

たちを大陸の日本人と同じように収容所に入れたら、ハワイの経済が倒れるでしょ。その当時、ハワイの経済は5つの白人の会社が握って(牛耳って)いたの。だから彼たち(の存在)が、ずいぶん影響したと思うの。ハワイは(アメリカ本土に比べて)もっと(日本に)近いでしょ。だけど、ハワイの日本人を収容所に入れなかった理由は、その5つの会社の影響で(会社に影響が出ることを恐れて)、ストップした(収容が行われなかった)の。だけど、一世の人たちは逮捕されたの。それでももちろん、仏教のお坊さんとか、ビジネスマン、武道の先生とか、そういうような人たちはほとんど(逮捕されたの)。

Q ハワイの仏教のお坊さんは、逮捕されたのですね。

(ヤエさん) はい、そう。それでね、ほとんどがまだお若い。だから、小さな子供が沢山いて、子供たちがぐずると困るので、家族の収容所をクリスタル・シティに設けたわけ。

(カルメンさん) あ、私たちのクリスタル・シティというキャンプはね、ちょっとユニークなキャンプでした。イタリア人、ドイツ人…。(ヤエさん) 日本。(カルメンさん) ペルーから。(ヤエさん) あと(ラテンアメリカ)大陸。(カルメンさん) Yeah, 大陸の人。そういう集まりでした。だから(収容者は)3000人位しかいなかった(とヤエさんに確認)。(ヤエさん) Yeah。(カルメンさん) そのキャンプには。

Q (執筆者はアメリカ大陸だと思い)大陸からも、大勢収容されていたのですか。

(ヤエさん) ほとんど(ラテンアメリカ)大陸からの日本人。そしてペルーの人で誘拐されたのは、2000人位でしょう。そのうち700人を(日本に向かう)交換船に乗せたの。あとの1300人がクリスタル・シティに入ってきたの。ドイツ人はmaybe 300人位。だけど彼たちは、戦争が終わる前に、ほとんどがドイツに交換船で戻りました。

(カルメンさん) それでね、日本人の一世ね、

ペルーの成功者が800人位ね、強制送還で日本に送られて、そしてアメリカに捕虜が帰ってきたの。だからね、そういう風にやってるの。でもね、ペルーの日系人(にとって)ね、ペルーは戦争にも入っていない(参戦していない)のに、どうしてそういうことになったのかといたら、捕虜としてはね、ヤエさんみたいにここ生まれの日系(アメリカ)人ですよ、市民権もあるし。だからそういう日系人を、(捕虜の交換要員としては)使えなかったの。

そしてアメリカ(政府)は、(日本人をペルーから連行することへの謝礼として)莫大なお金をペルー政府に払って、協力してもらったの。それが(以前放映された)NHKのテレビ番組には、(アメリカ政府がペルー政府に支払った)その(多額な)金額まで出ていましたよ。友だちがね、今(テレビを)見てごらん、テレビに出ているよと言って教えてくれたの。あれ見た時に、その金額はものすごい金額でした。

Q もう一度確認させて頂くと、日本政府がその金額を払ったのですか。

No, no, no. 日本政府(NHKのことではないかと思われる)がそのストーリーを見せていたの。アメリカの政府が、ペルーの政府にいくら払ったとか。そのためにね、ペルーのFBIが協力して、そういう(ブラック・リストに載った)日本人を検挙したわけ。それに基づいて、ブラック・リストに載った人を次から次へと検挙したの。

Q アメリカ政府が、ペルー政府にお金を払ったのは、経済協力という形で支払ったのですか。

No, no, no.

Q その時に、日本人をアメリカに連れて来ることに對して支払ったということなのですか。

そうです。(ヤエさん) だから、ペルー政府はcorrupt, 汚いの。汚い政府。最初はブラジルに(話が)行ったの。だけど、ブラジルは断った。

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

(カルメンさん)ですから、(結局、日系人がアメリカに連れて来られることになったのは)ラテンアメリカ13か国からでしたけれども、その80パーセントがペルーからでした。リマには日系人が集まっていたから、(そこから大勢が連行されることになりました)。結局、このような汚いことをしてね、以前カリフォルニアの代議士から手紙をもらって、そこにはアメリカがね、このような醜いことをね、恥じ入ったことをしたことは歴史に残っていると書いてありましたね。

結局、協力があったからこそ、実現できた。そしてペルーも貧乏な国でしたから、お金でと言ったら、やっぱしね(動いた)。(ヤエさん)ペルーから誘拐した(連れて来られた)日本人は、ほとんどが土地を持って、財産のある家族だった。最初は1942年に捕虜の交換があったのね。だけど、日本には沢山の捕虜がいたが、アメリカには日本人(捕虜)は少ないの。それで、成功しなかったの、その捕虜の交換は。だから1943年の交換のために、アメリカがペルーの日本人を誘拐したの。

(カルメンさん)それで結局、日本人はどここの国に行ってもまじめで勤勉でよく働きますよね。ほとんどペルー人の下で働かないで、自分でこう事業を起こしていたのね。だから結局、うちの父なんかも、沖縄県人会の会長や、ペルーでね、1年に1回、6月24日にアマンカイ(Amankay)という馬の催しがあるの。あの走る競馬でなくて、(ヤエさん)Horsemanship。(カルメンさん)Yeah、その馬をね、鞍をちゃんとドレス・アップして、そしてうちの父がああパンチョってご存知(と、執筆者に尋ねられる)。(執筆者)ポンチョですね、知っています。(カルメンさん)それをね、こうして被って、そして大統領がいる前でこうして挨拶をしたり、馬に乗って、こうして八の字を描(くように動)いたり、大勢の目の前で、ですけれど。やっぱりそういうことをやってね、危険人物と見なされたんじゃない。やっぱり、いつも上に立つのが好きな父でしたから。だから結局は、そうい

うことになっちゃったのね。

Q カルメンさんのお父様は、ペルーで逮捕されたことについて、カルメンさんに何かお話されたことはありましたか。

ここの日系人でも、どんな親でも、みんな一世ですからね。そういうね、苦しいことはいつも秘めて、仕方がない、ね。結局、我慢っていうね、その我慢でも断腸の思い。本当にね、心から。文句一つも言わなかった。ここの日系人のお父さんたち、みんなに聞いても、誰一人、もう本当に我慢という言葉で。だから1回でも、「どうして私たちが、このようなひどい目に合わなくちゃいけないの」といったことは、もう本当に聞いたことがない。(ヤエさん)一つも、一口も、文句を言わなかった。(カルメンさん)一世でしたからね。

Q それは、アメリカ人に対して文句を言わなかったということだけでなく、家族に対して、何も文句を言わなかったということですか。

その今の境遇。そのね、財産を没収され、スーツケース一つで、見知らぬ国で何をされるかわからない。そういう想いでも、その期間でも、何も聞いたことがない。だから、ここの日系人に聞いても、みんな同じことを言ってます。だから、一世の方は、本当にご苦労されたと思います。(ヤエさん)黙って、何も、一切文句を言わなかった。やっぱし、仕方がない。(カルメンさん)仕方がない。(ヤエさん)自分は、一つも(市民権などの)権利がないでしょ。(カルメンさん)日本人であることに誇りを持っていたと思います。(ヤエさん)Yeah、私の友だちでも、親はみんな何も言わなかったって。(カルメンさん)聞いたこともない。(ヤエさん)だから、あとから今museum(全米日系人博物館)でボランティアをしているので、もっと父と話せばよかったと思うけれども、質問しても、父は返事をしなかったと思う。(カルメンさん)それだけに、今、頭が下がるの。今、考えますと。「仕

方がない」ね、「戦争だから」ね、それで結局ね、外国にいても、日本人としての誇りを持って、この戦争はね、絶対に日本は一等国民だから勝つと、うちの父はそれが念頭にあったんですよ。だから結局、終戦になって、(日本に)帰りたい人は帰っていいし、ペルーに帰りたい人は帰って、ここに留まりたい人は留まっていいっていう時に、自分(父)は、勝ったのだから(日本に)もう帰るって。

そして、私には兄がいたんです。その兄がね、ペルーで新聞記者をしていたんですね。ですからその兄はね、独身組で、別に検挙されたの。そして別の、サンタフェというところにある施設に連行されて、もう本当に大変な扱いをされたの。お手洗いに行く時も、銃を突きつけられるほどでした。その後、クリスタル・シティで一緒になり、キャンプで学校の先生をしていたの。でも、本当に大変でした。

Q そうすると、お兄様も一緒に日本に戻られたのですか。

いいえ。私は、10人兄弟の一番下で、でも悲しいことに、(カルメンさん以外の)9人はみんなあの世に旅立ってしまったの。私は今、83(歳)ですから。考えてみれば、一番上の兄は(生きていたら)100いくつかになっているわけですから。20いくつかが違って、そのあとに9人生まれていますから。結局は、今兄弟のことを想うと、それがちょっと寂しい。

Q カルメンさんは、お父様が連行されたあと、お父様と同じ船で10人のご兄弟と一緒にアメリカに渡られたのですか。

結局ね、私が2つほど(2歳)の時、二人の兄と一人の姉ね、もうあのteenagerでしたの。うちの父が、日本で教育を受けさせた方がいいと考えてね、日本に送ったんです。ですからその兄弟たちとは、全然(会ったことがなくて)ね。(カルメンさんは)終戦後、両親と日本に帰って、(カルメンさんのご記憶の上では)初めて会ったんです。

そしてうちの父たち(カルメンさんのご両親)は、1910年代に沖縄からペルーに移住したの。父が24歳、母は23歳、それでそこで8人子供ができたの。でもね、最初ね、開拓移民でね、何も無いところから、それこそ苦勞をしたの。

Q 1910年代というと、ペルーに行った最初の移民だったということでしょうか。

そう、もう今度(日本人がペルーに最初に行ってから)110年になるの。この間、沖縄の知事さんがペルーにいらして、何か演説をいらしたの。

それで最初にね、カニエテという、もう本当に何も無いところを開拓して、そして今度、リマでなくてカジャオという港へ行って、うちの父はペルーのお酒ね、チチャ(chicha)と言うの。それを作って。そして、昔ですからね、馬がいて後ろに箱があって、そしてそこに積んだの。そして自動車を買ったあとは、こうスタートするのにね、何か前のエンジンをこうやらないと(引っ張らないと)ね。結局、1938年とか、1930年代でしたから。そして結局、そこにお酒を積んで、そういうお店に配達してたの。

そして今度はそれをやめて、アルゼンチンのブエノスアイレスというところに行ってね、乳を搾る牛を10頭か知らないけれど、買いに行って、連れて来て、牧場を持っていたんですよ。そして戦争がはじまったの。だからもう、みんな没収。(執筆者)これから新しいことをはじめようとされ、いざ、これからという、ちょうどそのような時だったのですね。(カルメンさん)そう、みんな次から次へとやって、みんな勇気があったのね。生活は豊かではなかったんですけど、沢山の思い出がありますね。何かこう、家族が一緒になってやったという。あの、本当に楽ではなかったんですよ。

Q ペルーでは、日本語学校に通われていたのですか。

ホセ・ガルベス(José Gárvez)という学校(小学校)でね、日本語とSpanishでね、時間を交代

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

でね(行われていました)。先生が通ると、きれいにこう最敬礼したりね、本当に何か日本の教育のね、修身というのを、最初からこう習った覚えがあります。

Q 学校の名前は、ホセ・ガルヴェスですか。

José Gárvez.

Q 現地の人たちは、そこには通っていなかったのですか。

No, 一緒です。みんな一緒。

Q 現地の人たちも、一緒に日本語を勉強したのですか。

はい。みんな一緒に、時間はね、こう、あれして⁷⁾。だから、そのSpanishと日本語だから、ペルーの生徒たちは(スペイン語の授業は一緒でしたが)、日本語の授業と一緒に出たという記憶はないんです。ただ私たちは、そのように(スペイン語での授業と、日本語の授業を両方習うように)もうなっていたの。だから、日本語とあれ(スペイン語で習っていました)。だけど、どうしても自分の国の言葉が強いですよ。ただ、(日本語の授業は)うわの空で聞いて、そして親にも話す時は、もうSpanishばかりでした。

Q ご家庭では、スペイン語で話されていたのですか。

もう、ずっと。日本に帰るまで。

Q ご両親は、どのようにしてスペイン語を身に付けられたのですか。

それが面白いんですよ。20年たっても、一世ですから、努力しないからSpanishが話せないの。そしたら日本語と、沖縄の言葉で私たちに話すの。で、私たちはSpanishで返事するの。だから、(カルメンさんは)ちょっとこう耳が(耳では)ね、こうわかっているけれど、それを表現できないからSpanishでこう言って。親はその日本語とあれ(沖縄の言葉)で言って。だか

ら、コミュニケーションは、良かったんですよ(うまくできていたんですよ)。別に困らなかったんです。ただ、日本に行って大変でした。

Q ただ、失礼なことをお聞きするかもしれませんが、その当時はお父様がものすごく権威をもっていらして、日本では家父長制といって、お父様がもう…。

大黒柱。それなんです。

Q 日本では父親が絶大な権限を持っていましたが、ペルーでも同じでしたか。

あのね、お母さんたちは発言力もないんですよ。もうお父さんが…。(ヤエさん)ボス。(カルメンさん)だからお父さんが、怖い。お母さんは優しくてね。(ヤエさん)どこの家族も同じ。(カルメンさん)Yeah, お母さんの思い出は、もう一杯ある。もう亡くなってから、1年間泣きましたよ。だから結局は、あの当時はお父さんには頭が上がらない。(執筆者)お父さんには、文句などは絶対に言えないということですよ。(カルメンさん)teenagerになって、文句を言ってね、叱られたことも一杯ある。言うこと聞かないでね。

Q 話が戻ってしまいますが、そうすると、お兄様二人とお姉様一人が日本で勉強されていて、お父様、お母様とご兄弟7人の9人でアメリカに行かれたのですか。

No. その中で姉が一人、ペルーで亡くなったの。そして兄も亡くなって、だからその二人の死亡があって。そして私と姉と兄と両親の5人でアメリカに行って、新聞社に勤めていた兄とはあとで(クリスタル・シティで)合流して。一人姉がいたのですけれども、何年前に94歳で、沖縄で亡くなったのですけれども、その姉は結婚していましたからね。一緒に行かずに、ペルーにずっと残っていました。

Q 結婚のお相手は、ペルーの方だったのですか。

いいえ、日本人。ペルーで、そういうペルー人との結婚はね(当時はあまり盛んではなかったけれど)。今は pure Japanese って、もういないみたい。あの、10年前にペルーに61年ぶりに行きました。そしたらね、大きな会館があるのね。(その会館にいらした方たちの)顔を見たら、もう異国人みたいね。でも、日本人の会館に入っているからね、つながりがあったと思います。

Q 当時は、ペルーの人たちとの結婚はあまりなかったのですね。

No, no. やっぱし、それは昔からあったと思いますよ。その国に住んでますからね。

Q そうすると、5人でアメリカに行かれたのですね。

そして新聞記者の兄があとから加わって、6人で。そしてその兄が、ここ(アメリカ)に残ったんです。というのは、8月15日に、戦争はアメリカが勝った、日本が負けたと、(兄は)もう知っているんですよ。新聞記者だし、色々なニュースが流れていて。

うちの父は、日本人は一等国民だし、絶対負けないと言って、親子で口論をしたりして。そして大勢の日系人がね、比嘉さんの息子は、非国民だって言うの。結局、日本人でありながら(負けたと言うなんて)。But my brother knew. 知ってたの。それで、どうしても帰ると(父が)言うから、うちのbrotherは「ここにいる、もう帰らない。」って言って、残って。

日本へ帰ってからのの方が大変でしたね。沖縄って全滅でしょ。最後の戦地。食べるものがなかったの。こういうね、洋服と物々交換で、芋とか、山に行って芋を掘りに行ったりして、もう本当に哀れでしたね。そしたら姉と二人で、山を登ってね。ずっと(食べ物などと)換えに行ったりしていたの。それを頭に担いで。そしたらね、誰もいないの、その山にね。もう、しんとしていてね。そしてやまびこね、私がね、「沖縄哀れだ。」って言ったら、向こうの方でね、

「沖縄哀れだ。」って返ってくるの。そんな思い出がまだあるんです。

Q 先ほど(インタビューを開始する前に)お話し下さいましたが、最初に神奈川県浦賀に船が着いて、それから埼玉にいらしたのですか。

はい、埼玉、3週間位、それから宮崎。だから宮崎の方が長かった。(執筆者)宮崎には、何か月位いらしたのですか。(カルメンさん)7か月か、8か月位。(執筆者)そのあと沖縄にいらしたのですか。(カルメンさん)はい。(執筆者)沖縄には何か月位、あるいは何年位いらしたのですか。(カルメンさん)Oh, 10年いました。そして、ここ(アメリカ)に来ました。

Q カルメンさんは戦争中、10歳の時に、最初にアメリカに来られたのですか。

11歳でここに来たの、ペルーから。

Q 11歳の時にアメリカに来られて、そして抑留所での生活後、日本に行かれたのですね。

だから日本に行った時は、すぐに high school に入れられたの。あの、elementary school も出て(卒業して)ないしね、いきなりして(high schoolに行くことになり)、本当にもう泣きたい位の毎日でした。それでうちのお母さんに愚痴をこぼしたら、「一生懸命にね、できる限りやりなさい。」って(言ってくれて)。その言葉にね、今でも感謝している。大変でした。みんなから、こうノートを借りたりね。

でも沖縄ではね、いじめられなかったね。そして言葉が、スパニッシュから日本語で、ちょっとこう、それはいつも笑われていた。でも、私も一生懸命にね、日本語を習いたいから。それを話していたら、スパニッシュのアクセントがこう乗ってくるのね。だから、それだけでしたね。あとは…。でもあの頃ね、教科書ってないんですよ。先生がね、ご自分で作っていたの。だから、その時代ですよ。1950年代ですから。

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

(ヤエさん)クリスタル・シティでも、教科書はなかったです。(カルメンさん)先生が作っていた。(ヤエさん)Yeah。(執筆者)日本の授業内容と日本の教科書を、そのまま持ち込んでいたと思っていました。日本の教科書では、なかったのですね。(カルメンさん)そうでなく、先生がちゃんと作って下さっていたの。(執筆者)活版印刷か何かで…。(カルメンさん)印刷か何かで、もう何十人分とか、クラスにいますでしょ。そういうの(教科書を使わずに、先生によるプリント教材の方)がかえって、(自分たちが頑張ろうと)努力したのかもしれないね。そうでないと、新聞とか書けないしね。顔は日本人でも(文章が書けなかったかもしれない)。

Q それでは、事前に送らせて頂いた質問に入らせて頂きます。ヤエさんのご一家は、和歌山県のご出身ですね。

父は和歌山県、母は福岡県。(執筆者)和歌山県はどちらですか。(ヤエさん)和歌山県の横谷⁸⁾。(執筆者)お母様は…。(ヤエさん)福岡県糟屋郡⁹⁾。

Q ヤエさんのご両親が日本からワシントン州のタコマにいらしたのは、いつ頃でしたか。

1925年。シアトルでの記憶(の最初)は、1929年、一番下の弟が生まれた時。(執筆者)ヤエさんは、何年のお生まれでいらっしゃいますか。(ヤエさん)私は大正14年、1925年。今年91歳になりました。(執筆者)おめでとうございます。(カルメンさん)すごいね、素晴らしい。

Q ヤエさんのお父様のご職業は先ほどお伺いしましたが、お父様は1年半、抑留所に入れられていたとのことでした。どちらのキャンプに入れられていらしたのでしょうか。

最初はモンタナ、そしてそこからニューメキシコの2か所、サンタフェとローズバーグ。その収容所は、Department of Justice(司法省)の管理。Department of Justiceの収容所に入っていた人の立場は、ほとんど捕虜。(執筆者)扱い

が非常に手荒で、厳しかったということでしょうか。(ヤエさん)I think so。(執筆者)捕虜のように扱われた時のことも、お父様は何もおっしゃらなかったのですね。(ヤエさん)全然。

Q ヤエさんとお父様が合流されることになったのは、いつのことだったのでしょうか。

一緒になったのは、1943年。私たちはまだ、アイダホ州にいたの。母と一緒にね。その当時、第二の交換船があった(出るようになっていた)わけね。(ヤエさんたちは)父と1年半別れていたでしょ。それで、父は一緒に交換船に乗ることを希望したら、(家族が)一緒になれると思って手配したの。だから、1943年9月の船に乗るため、母と第二人と私の4人で、アイダホ州からニューヨークに行き、父と再会したの。(でも)そこに着いた時に、船はもう一杯で乗れなかったの。だけど、父の立場は捕虜(prisoner of war)だから、私たちと一緒にアイダホ州の収容所に戻ることはできなかったの。だけど、一緒に住みたかったら、テキサス州のクリスタル・シティに行きなさいと(言われた)。テキサスの収容所は、DOJ(司法省)camp。そこで、戦争が終わるまで(過ごしました)。

Q そうすると、1943年9月に、交換船が一杯で乗れないということがわかってから、クリスタル・シティに行かれ、そこに、いつまでいらしたのでしょうか。

戦争が終わるまで。(執筆者)1945年の8月まででしょうか。(ヤエさん)Aha。でも、その収容所を出たのは1946年2月。母が、病気をしていたの。

Q 1946年まで、クリスタル・シティの抑留所はあって、閉鎖されていなかったのですね。

(カルメンさん)1947年まで、あった(存続していた)ってね。(ヤエさん)47年に終了したの。(執筆者)それは、自発的に残られていたのか、それとも、そこにいなさいと言われたのでしょうか。(カルメンさん)どうしてかしら。(ヤ

エさん)もう、閉めたの。(カルメンさん)だからね、次々とね、迎えに来て、もうみんなばらばらに出て行ったのね。(ヤエさん)戦争が終わって。(カルメンさん)Yeah, 終わって。だからその47年までいた人は、どうしていたのか、聞いたことはあるけれど。(ヤエさん)ペルーから来た60人位が、最後の47年まで、どこにも行かないと言って。それで彼たちだけが、ニュージャージー州のシーブロックに、家を貸してくれるからと、そこに行った。(執筆者)そこに、シバヤマさんも行かれたのですね。(カルメンさん)Yeah. そのアスパラガス工場で、安い賃金で働いた。(ヤエさん)だけど家を貸してくれるから、住むところがなかったで行った。(カルメンさん)うちの(新聞社に勤めていてアメリカに残った)兄も、そこに行ったの。

Q 住むところもないし、不法外国人という扱いをされていたので、正規に働くことができなかったということなのでしょうか。

結局、お給料はくれたけれど、本当に少なかった。(ヤエさん)その収容所は、ほかの大陸の日系人も入っていたのよ。戦争が終わって、(シーブロックに)行ったの。(カルメンさん)一応は小遣いみたいだね、もらってはいたんですよ、沢山ではなかったけれど。(ヤエさん)だけど、一番大事なことは、住むところがあったということ。

Q ヤエさんは46年に抑留所を出られて、どこに向かわれたのですか。

あの、ロサンジェルスに。2月で冬は寒いでしょ。母は手術をしたので、先生(医師)ができれば暖かいところに行った方がいいって(アドバイスをしてくれた)。で、父はどこの収容所にいた時は覚えていないけれど、とにかく和歌山の同じ村の出身者と会ったの。私の苗字は珍しいので、加納川と言う。それで父の兄貴が村長をしていたの。だから、その名前を知っていたの。だから、その上田さんがその村長さんを知っていて、同じ村人は兄弟や親戚のようにな

るでしょ。それで、手紙のやり取りをしていて、そして父が上田さんに、戦争が終わってもシアトルには帰らないということを手紙に書いていたの。すると、上田さんはロサンジェルスに來なさい、僕の家、二階建ての大きな広い家があるから、しばらく自分のところに泊まって頂戴と言ってくれ、こちらに來たの。

Q 上田さんというのは、お父様のお友だちになられた方ですね。

同じ村人。収容所で会ったの。(執筆者)収容所で会われた方が、ロサンジェルスに家を買われたのですか。(ヤエさん)いえ、戦争の前に家を持っていて、商売をしていたの。(執筆者)そして終戦後、ロサンジェルスに戻ることができたのですね。(ヤエさん)Yeah. (執筆者)よかったですね。(ヤエさん)その家は、年頃の娘さんがいたが、子供も大きいし、その家の名義はアメリカ人の子供になっていました¹⁰⁾。(執筆者)戦争が終わっても、まだしばらくの間、一世の方たちは市民権を付与されませんでしたから、やはりアメリカ生まれの子供たちが家の名義人になっていたのですね。(ヤエさん)Aha.

Q では次に、カルメンさんが抑留所を出られた時のことをご紹介頂いてもよろしいでしょうか。カルメンさんのお父様とご家族は、1943年にクリスタル・シティに入られたのですか。

うちの父は、1943年から1年間(逃げていたから)、本当はもうアメリカに行っているはずだったのだけれど、1944年から1945年までの2年足らず抑留所に入っていました。終戦の年の1945年12月2日、ワシントン州シアトルから船に乗って、そして3週間かけて日本に帰ったんです。みんなはね、(戦争に)日本が勝ったという意気込みで帰ったんです。

横須賀に着いた時は、クリスマス・イヴでした。そしたらね、船員さんがね、船の周囲で小さなボートに乗って、残飯を拾っていたの。(クリスタル・シティの抑留所で先生をしていた)

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

石垣先生がね、まだ船から降りていないんですよ。その船員さんに、「戦争に日本は勝ったのですか。」と聞いたんですよ。そしたら、「いいえ、負けました。」と答えるので、それが信じられなくて何度も、「戦争に勝ったでしょ。」「いいえ、負けました。」と言われて。すると、先生は怒って「バカヤロー。」と怒鳴ったんですってね。その船員さんたちはね、何かボートで、多分残飯か何かを拾っていたんじゃないかしら。あの時はもう本当に…。

その東京に着いた時の、印象をお伝えしましょうか。電車が爆発したそのまんま。まだ、あったもの。東京の真ん中。そしてね、パンパン娘と言ってね、GIと組んでね、みんな歩いていたもの。終戦後。あなた、そのこと、ご存知ない。(執筆者)パンパンという名前は、聞いたことがあります。(カルメンさん)日本人の若い人たちがね、GIという兵隊と腕を組んでね。(ヤエさん)不良の女性。(カルメンさん)スカーフをしてね。もうあの人たちは、ほらね、自由に色々な物を得られるでしょう。あの頃の時代。そしてね、日本はもう焼け野原でしたよね。みんな道端で、ミカン山盛り10円といった感じで売っていたの。それを買うお金もなかったんですよ。

(ヤエさん)だけど、あのクリスタル・シティから交換船に乗った人たちは、みんな日本が勝ったと思っていた人が、ほとんどなのよ。(カルメンさん)うちの父なんかは、(負けたことを知った)その晩にね、本当に失望のどん底で病気をしちゃったの。かわいそうだった。そしてね、道端に引揚者がもうずっと、ずっといましたよ。(執筆者)行くところがなくてですか。(カルメンさん)もう、溢れているの。引揚者。そしてね、私たちはご飯と言われたらね、一列に並んでね、おみおつけに大根の葉っぱが切らないでポトンと入っていて、麦飯だったの。私たちは麦飯を食べたことがないから、麦を一粒ずつ、こう、取ってたの、コメから。それだけ。一列にこう並んで。それから、もう苦労がはじまりました。

だから、食べ物のありがたさが、本当に身に染みましたね。私のteenagerは、もうひもじい思いをしたことしかないね。「もっと食べたい」とかね、なかったんですよ。だから、日本の方は大変な思いをされたと思います。だから今の、(NHKで放映されていた)「とっと姉ちゃん」を見たら、いつもこう、何かあの当時を思い出していますよ。

(執筆者)私の祖母も、自分の大切にしていた着物を持って列車に乗り、農家に闇でお米と交換しに行ったそうなんです。その時に満員の電車にぶら下がって行く人や、途中、トンネルに体が引っ掛かり、亡くなった方もいたと言っていました。(カルメンさん)ええ、もう、みんな、ぶら下がっている。乗るの、もう、我先。もう本当に、あの、時たま見せてますよね、(テレビなどで)戦争の時(の状況を)。そういう感じでした。もう、ぎっしり。そしてもう、入れなくて、どこかにこうぶら下がって。それでも、もう必死で、乗っていましたよ。

Q ベルーから出られた時には、自分たちの持っていたお金を持って行くことはできたのですか。

お金どころか、スーツケース一つでね、だからお金は…。あの時は子供でしたからね、親は持っていたかどうかは覚えてません。(執筆者)それで収容所では、アメリカ政府から、お金をもらっていたのですか。(ヤエさん)収容所で仕事をしていたら…。(カルメンさん)ほら、収容所のマーケットで買い物ができるよう、小さな紙切れでね。色が違ったの。それは、歳の年代で、18歳だったら一応もう少し、子供でしたらこれ位と、年齢に応じてね。(ヤエさん)1日の配給。食べ物。(執筆者)つまりそれは、そこ(キャンプ)でしか通用しないもので、船に乗られた時には、使えなかったのですね。(ヤエさん)そう、そう。

Q 日本円を持たないで、どのように(生活を)されていたのですか。

(カルメンさん)もう、お金なんて。買い物をした覚えはないんですよ。たぶん、政府の支給を待って、そして並んでお米をちょっとこう、もらったりしてね。そしてあの頃、清潔でないからシラミがいたのね。主婦の人なんか、もう子供のシラミを取りながら、一列に並んでお米を少しもらう、あの時代ですよ。本当に、テレビで描かれているようなことがあったの。今のお若い方は、テレビを見て「そうだったんだ」と実感されているけれど、もう本当に体験した人たちは、あの時はもう必死でしたよ。生きるために必死でした。

沖縄は最後の戦地でしたから、もう破壊されて、ソテツの根っこを乾燥させて、おみおつけに入れたり、もう芋が一番のごちそうでしたね。かぼちゃは毎日3食、だしも入れずに、そして芋の葉っぱでおじやを作って、そして硬いおじやでなく、おかゆのように柔らかいおじやに、味噌をちょっと入れて食べた。あの時は、家族が9人で、我先に食べないと。(執筆者)栄養をつけないといけませんからね。

そしておまけに、うちの父は長男でしたからね。その沖縄って、先祖代々責任というものがある、ある男の子ね、フィリピンで(日本人の)両親も兄弟もみんな亡くしてね、その男の子を養う義務があったんです。そして向こう(フィリピン)では、本当に食べ物がなくって、その男の子は栄養失調でお腹が(こんなに)大きかった。痩せて、お腹だけがこんなに大きかったの。栄養失調になると、そうなる。もう、何を食べたかは知らないけれど。その中で、その男の子と一緒に生活をしたんですよ。責任というのがあって、何か先祖代々ね。だから、それも思い出。まあ兄弟みたいになったんですけどもね。みんな家族を失って、フィリピンで。

結局、high schoolに行っていた時なんかはね、みんな学校まで歩きますよね、長い距離をね。そしたら友だちがいつも家に来て一緒に歩いて、その友だちは学校の途中にお母さんが、ちょっとしたレストランを持っていたの。帰りがけに寄ったら、彼女のためにお母さんがうど

んとかの上に色々な物を上に乗せて、彼女一人のためだけに作っていました。私はいつもそれを眺めて、ああ食べたいなあ、幸せだなあ、この人って思ったりしたのをいまだに覚えています。

ただそのお母さんは、「あんたもこれ食べなさい。」と言う、そのゆとりがなかったのかもしれない。今でしたらね、「いらっしやい。」とか何とかってね、言ったのかもしれない。でも、あの頃はそういう時代でした。だから、いつもこう眺めていて、「ああ食べたら幸せだろうなあ」と思っていました。

Q もう一度、ヤエさんの質問に戻らせて頂きますが、ヤエさんもカルメンさんもクリスタル・シティで、ヤエさんは約2年少し、カルメンさんは2年弱を過ごされたのですね。

(カルメンさん)でもクリスタル・シティにいる時、私たちは全然(互いに)知らなかったんですよ。というのは、ヤエさんの方はもう英語ばっかし、ここはもうSpanishで、ペルー(出身)の人はペルー(出身)の人で、ちょっとこう固まっていました。

こう何かDとかEとか、色々なセクションがあったね。(ヤエさん)あった。(カルメンさん)そしてちゃんと、少女団(ガール・スカウト)もありましたよ。制服もちゃんと着て、グリーンのスカーフを付けて、そして何かこう誓ったり。思い出したら、あの時は子供ですからね。ただ色々なものに、もうついて行くだけ。

そして日曜日になるとね、ある会館に子供だけを集めて、先生が日本語で、宮本武蔵の話をもつて下さったの。そしたらね、(その話が)とってもexcitingでね、次の話をしてもらいたいのに、そこで切れちゃうの。もうね、その日曜日が、(日本語が)話せないけれど、ちょっとunderstandできるからね、楽しかった。

いつもね、このexcitingの場でね。(執筆者)テレビ番組のようですね。(ヤエさん)Yeah, yeah. (カルメンさん)今だったらビデオを沢山

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

撮って、時間が夜中でも、ちょうど「冬のソナタ」のように何度も見られるのに。私、あれを3度見ました。そしてあの(番組をやっていた)時、私はまだ働いていたんですよ。そしたら、12時になるともう寝なくちゃ、明日また仕事だからと思ったのだけれど、そこにビデオがあったからね。その切れているところがもう待てないの。だからいつもね、朝は寝ぼけた顔をして…。

Q そうすると、クリスタル・シティにはヤエさんのご家族以外にも、お父様がほかの収容所において、ご家族と合流するために来られた方たちがいらっしやいましたか。

(ヤエさん) ほかの収容所にいた二世、一世も一緒でした。(執筆者) 同じグループとして、一緒に住んでいらしたのですか。(ヤエさん) Aha. 二世のグループで、私は日本語学校に行ったの。もう、ハイスクールを終わっているから。それで私と同じような二世は、日本語学校に、1日通いました。だから、ほとんどの科目が日本語でした。その先生は、ほとんどがお坊さん。(執筆者) お坊さんもまた、家族を連れていらしたのですか。(ヤエさん) そう、そう。彼たちの子供たちは、まだ小さい。私たちは、もうteenagerでしょ。

Q teenagerというと、一番多感な時期を収容所で過ごされたのですか。

だけどクリスタル・シティでは、スポーツをずいぶんしました。テニス、そして男性はバスケットとフットボール。(カルメンさん) 野球。(ヤエさん) 野球。(執筆者) 女性はテニス。(ヤエさん) Uh-huh.

Q 例えば、カルメンさんのグループとヤエさんのグループとの交流はなかったのですか。

なかったです。(執筆者) 交流してはいけなかったのですか。(お二人とも) No, no, no, no. (カルメンさん) ああ、言葉が通じないしね。(ヤエさん) 通じないから。(カルメンさん) 別にね、

そういうゆとりはなかったね。(ヤエさん) Uh-huh.

Q 楽しいと思われていたこともあったけれども、ほかのグループとの交流というところまではいかなかったということですね。

(お二人とも) そう、そう。(カルメンさん) ただね、ここを出てから、Carmenと言ったら普通日本人にない名前でしょ。「あなたはペルーからなの。」それから「Oh! クリスタル・シティに行ったの。」って、そこから話はずんでね。もうそれから(あとは、仲良くなれました)。

Q 最初に(同じクリスタル・シティにいたと)聞かれた時には、もう、びっくりされたのではありませんか。

だからほらね、私の日本語の名前は、芳枝。だけど、もうずっとカルメンで通しています。

Q クリスタル・シティでは、ヤエさんもカルメンさんも同じような、監視下に置かれていたのですか。

そうですよ。隔離されて、門には銃を持った人たちが監視をしていて、鉄条網に囲まれて。そういう環境の中にいたことは、同じでした。もう一歩も出られない。もうみんな、wire(鉄条網)があつて(張り巡らされていて)。(ヤエさん) それか、普通の収容所よりもっと高い。(カルメンさん) もっと高い。(執筆者) 逃げられないように。(ヤエさん) Yeah. (カルメンさん) 私たちはもう、結局、捕虜との交換としてそこに入れられているから¹¹⁾。

Q そこで何かやってはいけないというような、規則はありましたか。例えば収容所では門限はなかったのですか。自分たちに割り当てられた家に、何時から何時まではいけないでいいですか。

(カルメンさん) もう、それはキャンプ内でしたら自由。でも、もう柵を越えると撃たれちゃうのね。

Q クリスタル・シティでは撃たれた人がいたのですか。

(ヤエさん) 一人、頭がおかしくて病气していた人が、鉄条網をこう登っていったの。“Don't shoot,” 「撃つな。彼、病气している。」と言ったけれど、銃で撃たれて死んだね、一人。(カルメンさん) だから結局は、もう本当にね…。(ヤエさん) Yeah. クリスタル・シティにいた全部の人が捕虜の立場でしょ。捕虜は国際条約(Genève International Conference)¹²⁾ に応じて、やっぱり捕虜の扱いの程度がね、ある程度でないといけなかった。だから私たちの食べ物、普通の収容所より良かったの。しかし、点呼が行われ、毎日顔を見せないと(いけなかった)。そして手紙は、検閲(された)。それだけの自由がなかったの。

Q 点呼は一日1回でしたか。

Uh-huh. 夕方、5時に顔を見せないと(いけなかった)。おトイレに入っても、顔を見せないと(いけなかった)。

Q 点呼と手紙の検閲以外は自由でしたか。

Uh-huh. (カルメンさん) その中では、もうね、束縛されなかった。(ヤエさん) だから毎日、普通の生活で、一番いいのは、家庭生活ができたこと。(カルメンさん) 家族と一緒にね。(ヤエさん) Uh-huh. 家族とだけで食事をしたの。(カルメンさん) マーケットに行ったらね、お母さんが(買い物をした)。(ヤエさん) 私の母は料理が上手だったから、毎日おいしく夕食を食べました。

Q 逆に言うと、お母さんの立場にしてみれば、毎日夕食を作らなくてはいけなかったのですね。出されるのではなくて。でもご家族にとってみると、それが本当に心が豊かになるひと時だったのですね。

(カルメンさん) ひと時でしたね。(ヤエさん) だけど、食べ物は不自由しなかったです。コメもあったし。外(ほかの収容所のこと)ではバ

ターがないけど、そして砂糖もない。だけど、私たちにはありました。配給だけれど。At least we had it. (カルメンさん) だから結局、10のキャンプよりは待遇が良かったね。あの人たちは、食べるの(食べる時には)、一斉にこうね、みんな一緒に座ってこうもらって頂いた。私たちの場合は、ちゃんと小遣いももらって、マーケットに行ったら買い物して、それを料理してた。だから結局、その10の中に入っていないんです、クリスタル・シティね(10のキャンプとは別扱いでした)。(ヤエさん) 管理が違う。管理していたグループが違う。(カルメンさん) Department of Justiceが管理していました。

(以下、次号に続く。)

【付 記】

本研究は科研費基盤研究C(課題番号JP26380198)「第二次世界大戦下に強制収容された日系ラテンアメリカ人に対する戦後補償」の研究成果の一部である。

注

- 1) 例えば、2007年に『ワシントン・ポスト』紙に寄稿したベセラ(Xavier Becerra)氏とラングレン(Dan Lungren)氏による記事では、「ほとんどのアメリカ人は日系アメリカ人が収容されたことには気付いているが、他国にいた日本人を祖先に持つ人々に対し、偏見によって助長されたアメリカ政府の活動について知っている者はほとんどいない」とある(Xavier Becerra and Dan Lungren, “Justice for the Forgotten Internees,” *the Washington Post*, February 19, 2007)。
- 2) Campaign for Justice, <http://www.campaignforjusticejla.org/whoweare/index.html>, 閲覧日: 2016年11月11日。第二次世界大戦中に日系ラテンアメリカ人に起きた「ほとんど知られていない話」と戦後補償について、史実を普及させる目的で1996年に組織された。
- 3) NCCR, <https://www.ncrr-la.org/about.html>, 閲覧日: 2016年11月11日。
- 4) 司法省移民帰化局が管轄する抑留された家族が居住していた施設。戦争開始時、多くの抑留された父親は妻子と別々に暮らすことを余儀なくされていたが、そうした家族が再会し、ともに暮らしていた。

同施設は、1942年11月2日から1947年11月1日まで開かれていた。最も多い時には、4000人が

Mar. 2017

テキサス州クリスタル・シティ抑留所をあとにして71年

- 収容されていた。もともとは2000人を収容できる、農業安全保障省による管轄の移民労働者用の施設であった。抑留所に転向するため、住宅が増設され、施設には囲いがなされ、監視小屋が建てられた(National Park Service, U.S. Department of the Interior, National Historic Landmarks Program, "Japanese Americans in World War II," pp.15-16)。
- 5) ジクロロジフェニルトリクロロエタン(dichlorodiphenyl-trichloroethane)の略称。有機塩素化合物の殺虫剤の一つであるが、蓄積されて残留毒性が高いため、日本では1971年に使用が禁止された。
 - 6) アメリカ軍基地にある売店のこと。post exchangeから取った言葉。
 - 7) 日系人もほかの生徒と同様、同じ学校に通っていたが、母語であるスペイン語やほかの教科は全員で、日本語は日系人だけが学んだと思われる。
 - 8) 現在の和歌山県紀の川市横谷。
 - 9) 現在も同郡の名称のまま存在。
 - 10) この部分について、あとからヤエさんに確認したところ、ロサンジェルスの家とは、上田家の誰か、おそらく戦争開始以前に土地を所有することができた法定年齢に達していた長男名義で購入したと思われるが、実際には両親の家と見なされていた。
 - 11) カルメンさんは、捕虜との交換のために収容されることになったと認識しはじめたのは、ペルー在留の一世の成功者たち約800人が日本に強制送還され、その後、アメリカ人の捕虜がアメリカに帰された頃だと回想する。
 - 12) ジュネーブ条約(Geneva Conventions)のこと。1864年に赤十字国際委員会が、武力紛争の際に、傷病者および捕虜、文民の保護に関して規定した「戦地軍隊における傷者および病者の状態の改善に関する条約」を指す。

(2016年11月18日掲載決定)